



日本福音ルーテル教会 北海道特別教区報

第40期第3号
2020年12月12日
発行者:小泉基

「聖霊によるつながりは神さまの愛」

小泉 基

この80枚のハガキの束は、わたしたちに何を語りかけるのでしょうか。それは端的にいって祈りであり、情熱であり、不安であり、感謝であり、共感であり、おもいやりであり、そして愛であると感じられます。

教区のみなさんがさまざまな思いを込めてこの作品展にご参加下さったことが、これらのハガキの表からも裏からも感じられて、この教区のつながりの中に招かれたことを嬉しく思いました。教区長に選任されたからには、すぐにでも全ての会堂を廻ってみなさんとの交わりに身を浸したいと願いましたが、新型感染症のために絞り込まれてしまった教区予算ではそれもかないませんし、そもそも道内移動すら満足に出来る状況ではありません。

そんな中にあってわたしも、イースター以降、朝食前の短い時間を主の祈りとともに過ごすようになりました。毎回多くのことを想起することは出来ません。それでもその日によって「御名をあがめる礼拝を続けられますように」、「早く御国が来ますように」「わたしたちの思いではなく、神さまの思いが地上で実現されますように」「飢餓や、病や、感染症で苦しむ世界中の人たちにこの日の糧を与えてください」「わたしたちが赦せる者でありますように」「わたしたちの犯してきた歴史と環境への過ちが赦されますように」「自己中心の誘惑からわたしたちを救い出して下さい」「わたしたちの名誉や力を求めるのではなく、神さまの栄光や力が明らかになりますように」と、教区の方々がともに祈りを合わせておられることを思い起こしながら、くり返し思いを神さまへと向け続けてきました。

そのようにして続けてこられたおひとりおひとりの祈りは、個人的な祈りでありながら、聖霊の働きによって結ばれてきた祈りであるのだということを、わたしはこれらのハガキの束を前に改めて思わされたのです。そういう意味でこのハガキの束はわたしたちの祈り、情熱、不安、感謝、共感、おもいやり、愛であると同時に、神さまの、わたしたちに対する愛の証しであるに違いないのです。追加の作品応募も心からお待ちしています。



各教会の近況報告

【函館教会】

小泉 基

各地の教会と同様、感染症対策に頭を悩ませつつ、それなりに充実した秋を過ごしました。

■スモールマーケット＆メルカリ祭り口 去年成果を得たミニバザーの代替プログラムとして、集約した遊休品のネット販売を試行しました。結果は成否半々で、ネット販売向きの商品と店頭販売向きの商品があることがわかりました。そこで使われないままになっている集会室を常設販売スペースとし、9月6日から週3日限定開催の「ルーテル・スモール・マーケット」を10日間開催。すると想定以上の手応えがあり、メルカリでの販売と併せて昨年度のバザーを上回る収益を得ることが出来ました。感謝！



■沢知恵オンラインチャリティーライブ口 全国教会でのチャリティー活動の推進のために呼びかけられた同ライブに函館教会も参画。10月3日の午後、九州の豪雨被災地を覚えつつ、沢知恵さんのキュートな歌声をオンラインで堪能しました。

■北海道外キ連オンライン学習会「コロナと外国人住民」口 10月16日夕刻。コロナ状況下でひと倍困難な状況にある外国人住民の現状と支援の取り組みについてオンラインで学びました。

【恵み野教会】

中島 和喜

予定していたコンサートやバザー・親睦会が軒並み中止となりましたが、今できることをやっていこうという思いを確認しつつ過ごしてきました。9月には教会の方々を対象に数週にわたり「教会内バザー」を開きました。久々に買い物を楽しむことが出来たと好評でした。また新たな奏楽者も与えられ、月に一回は礼拝の奏楽にハープが用いられるようになりました。

10月11日には修養会を開きました。「レクティオディヴィナ」という默想と沈黙での聖書へのアプローチ方法を用いて、沈黙と共に聖書を読むことの大切さを受け取りました。

11月1日の召天者記念主日は例年よりも多くの方が来られました。集会や行事は全て中止になりましたが、共に礼拝に集える喜びがいかに大きいかを皆で確かめる日となりました。

現在はクリスマスに向けての準備を進めています。例年のような燭火礼拝や祝会はもてませんが、讃美歌や触れ合うことが難しいなら視覚と聴覚に訴えかけるアプローチでいこうと話しています。「短縮・自粛」ではなく「変化」であると受け取って、どんな礼拝が出来るかと楽しんで話し合っています。



【札幌教会】

新型コロナウィルスの感染拡大のため 5月末まで約 2ヶ月間に渡って公開の礼拝を中止しましたが、6月から礼拝を再開。順次、礼拝後の集会や週日の学びも再開されました。教勢も一時は去年の同時期よりも上回るほどまで回復しましたが、ご存知の通り 11月に入つて北海道は感染拡大の第 3 波に見舞われています。再び礼拝を中止しなければならないかどうか役員会でも慎重に議論が進められていますが、感染予防を徹底した上で出来る限り礼拝は続けていくつもりです。このような時期だからこそ、礼拝に来て、祈りを捧げたい方がおられることを肌身で感じています。事実、ここ最近各礼拝堂では求道者の方が現れ、このクリスマスには受洗される方もおられます。主の導きに感謝いたします。

このような先の見えない状況ですから、当然のことながら礼拝に来ることを躊躇される方々もおられます。そのような方々のために教会としてもオンライン礼拝を続け、またメールや郵送による説教原稿送付を希望される方には牧師が対応しています。困難な時だからこそ信仰が鍛えられ、養われるという側面もあるでしょう。北海道特別教区に連なる皆さんとの信仰のためにも祈りを合わせたいと思います。

日笠山 吉之



【帯広教会】

主の御名を賛美します。コロナ禍の中、礼拝を休まざるを得ない方もおり、一同が集い礼拝後の食事も共にすることが出来ない日々ですね。でも、帯広教会はめげません。10月3日（土）にネットによる沢知恵チャリティーライブ（胆振東部地震キリスト教支援連絡会主催）を行いました。ゴスペルシンガーの沢さんの透き通った声に心が洗われる思いがしました。改めて歌での賛美はいいなあって思いました。11月3日（火）の1日神学校にも参加しました。総合テーマは“いのち守る”です。今の時代にふさわしいメッセージをいただき、色々と考えさせられました。また、神学生の顔を見ることが出来力づけられました。帯広教会と言えば豆というような声もあります。今年も皆様に十勝の豆を送ろうと、換気に気を付けながら全集中で作業を進めております。教区報を手にされる頃には皆さま美味しく召し上がっていることと思います。注文し、支えて下さる事を感謝いたします。アドベントに入り心から主の生誕を祝う気持ちはあります。キャンドルサービスも工夫を凝らさなければなりません。祝会も色々な制約を考えながら行うことになるのでしょうか。私たちは主のもの、主の御力で希望を持って、乗り越える先を見る事が出来ます。コロナ禍の一日も早い終息を祈ります。

岡田 ひとみ



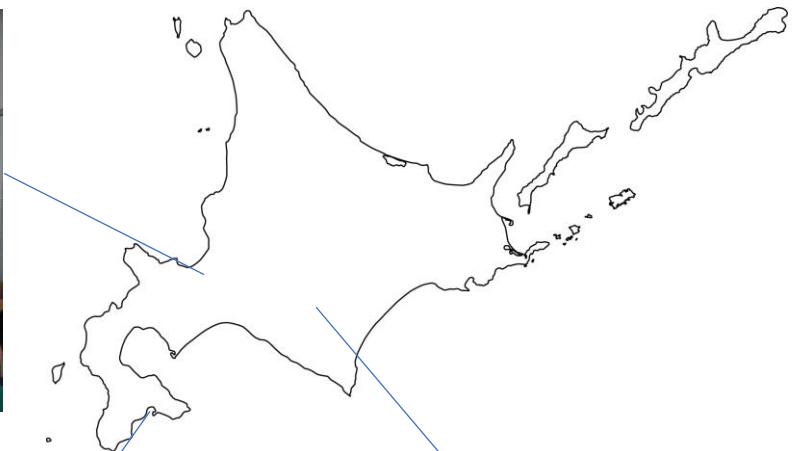
オンライン一日神学校&教区の集い

岡田 薫

11/3日(火)に行われたオンライン一日神学校には、函館、札幌、帯広の3会場に集った有志(約30名)が参加。通信環境の不安を抱えながらも懐かしいチャペルからの礼拝配信が始まつた頃には、空間を飛び越えて各地に集つた仲間たちとつながりを得たような感覚を覚えた。

江口再起教授の講演「パンデミックとルター：死と向かい合つて生きる信仰」では、“コロナもまた神の被造物”という発言に目から鱗が落ちたような気がした。①人類にとって疫病とは何か、②ペスト流行期におけるルターの考え方、③コロナに対して教会はどうあるべきか。という課題はルターセミナーでも取り上げられていたが、改めて「キリスト者は自分の信仰心や教会のことばかりを心配してしまうのではなく、たとえ私に信仰心が無くなり、たとえ礼拝が無くなつても、それでもイエス・キリストは私も教会も世界もすべてを守つていてくださるということを信じ、愛の業へと押し出されるのである」という師の言葉を胸に刻み、大学シンポジウムでは、あまりなじみのなかつた福祉と心理の専門教育について知ることができ、神学校紹介では証しを通して神学生をこれまで以上に身近に感じることができた。

公式プログラム終了後には“オンライン教区の集い”を30分ほど行った。人と人とのぬくもりのある交わりを遠慮しなければならない中で、インターネット環境を用いての交流はやってみると想像よりも効果があつたようである。実は帯広ではその有用性を認めながらも手を伸ばすことを躊躇していたのだが、今後、少しずつ機材を整えて環境整備を行っていく方向で話が進んでいる。午後のひと時という限られた時間の中ではあったが、内容も濃く、収穫も多い経験であった。



教勢動向

札幌教会

・召天 西田哲治さん（6月 6日）

荻野正起さん（10月 28日）